

情報メディアとしての俳句に対する学際的アプローチの試み —共通体験に基づいて詠まれた俳句とその読みの定性的分析を通して—

皆川直凡*・鈴木雅実**

大学の授業の一環として歩き遍路が行われ、参加者79名は俳句を2句ずつ創作した。また、そのうちの20名は俳句の鑑賞会に参加し、鑑賞対象とした150句から10句を選んだ。分析1では、第1著者が上記のうち高句10句の鑑賞文について定性的分析を行い、第1著者の俳句経験から見いだしてきた有季定型・写生派の選句基準との関係を検討した。その結果、情景のわかりやすさ、独創性、作者の心情への共感、余情といった選句基準は俳句経験を越えて共有されるということが明らかとなった。分析2では、鑑賞会における選句者の多寡による俳句の特徴分析をおこなった。その結果、下記の成果が得られた。著者2名による協議の結果、上記の俳句は、「風物や出来事の報告に終始するもの」と、「風物や出来事を内省的にとらえて表現するもの」の2種類に大別され、選句者数に比例して内省的な俳句が多くなるということが明らかとなった。

[キーワード：情報メディア、俳句の創作と鑑賞、定性的分析、感性コミュニケーション]

1. 問題と目的

俳諧の連歌に始まり、その発句が独立したものとされる俳句は、松尾芭蕉によって芸術としての完成の域に達したとされるが、それ以降も、与謝蕪村、小林一茶をはじめとして数多くの俳人を輩出している。特に、明治期の近代俳句の確立（正岡子規、高浜虚子ほか）と、それに続く所謂4S（阿波野青畝、高野素十、水原秋桜子、山口誓子）による俳句革新を経て、その裾野は大きく広がり、佐藤（1987）や山下（1998）などが述べているように、20世紀後半からは世界の様々な地域で各言語による創作活動が盛んになっている。また、最近の学校教育（初等・中等教育）では、俳句を題材とした授業が行なわれることが多くなっており（たとえば、皆川・大黒、2004；皆川・正岡，2008）、ドイツ等の諸外国においてもHaikuが教育に取り入れられている（加藤，1996）。

このような状況が生まれた理由として、幾つかの要因が挙げられる。俳句に内在する特性としては、従来から、その簡潔性、季語、五七五のリズム、切字等によって醸成される時間的・空間的な余韻、等々が指摘されている。また、これらと関連して俳句は、短さの故に、対象を説明しつくすというよりは、イメージをようやく喚起することができる最小限のことばを提示する。さらに、作者（詠み手）と鑑賞者（読み手）の関係が極めて接近していることにも注目すべきである。句会では、指導者的な立場にある人を含めてすべての参加者の作品が無記名の状態で批評の対象となり、コミュニケーションを通じて、

作者も予想しなかったような意外な読みが発見され、それが共感し得るものとなる場合もある（坪内，1999）。従って、意味の伝達を主な目的とする散文とは異なり、俳句を媒体として人々は感性を共有し合うのである。このようなことから、俳句は、五七五の有季・定型によって、凝縮された作者の思いを伝える、日本発信のCGM(Consumer Generated Media)の先駆けとされている。

皆川（2005）は、俳句を日本の伝統芸術の一つであり、世界有数の短詩型であるとし、その俳句の特徴、および俳句を介して展開される人々（作者、読者）の心の様相に対して、認知心理学的方法を主体とする基礎研究（連想法、語句間相互関連度評定法、意味微分法、実験法などの方法による、季語の心理特性や俳句の創作と鑑賞の心理過程の分析）、ならびにそれを基盤とする教育実践の両方向からアプローチし、俳句の奥深さ、おもしろさを伝えるとともに、日本人の心性にせまろうとした。皆川・賀集（1990）は、その先駆的な研究であり、高支持型の俳句と無支持型の俳句を刺激材料として語句間相互関連度評定法による実験をおこなった。その結果、高支持型の俳句のほうが季語を中心として構成されるという特徴を強くもつことがわかった。この結果は俳句に他者からの共感をもたらすのは、句全体としてのまとまりのよさではなく、季語を中心とした結びつきであることを示したものと解釈された。これらは季語が情緒的にも統語的にも俳句の中心をなしていることを示す心理学的な証

* 鳴門教育大学 大学院 基礎・臨床系教育部

** KDDI 研究所ヒューマンコミュニケーション部門

拠であるとされ、第1著者による一連の研究によって得られた、「季語が人々の意識の中で季節と強く結びつき、さまざまなイメージを喚起する象徴性の高い素材である」という結論とあわせて、季語の表面的特徴とその背景にあるものという二重構造が俳句の意味の二重性をもたらす要因の一つであることを確証するものであるとされた。

俳句は、自己の経験の記録として、対象を凝縮して表現するという特徴を有するが、それを鑑賞する他者との間のコミュニケーションも重要であり、句会などでは詠み手（作者）が同時に読み手（鑑賞者）として参加して交流する時間も重要視されている。俳句は、五七五の短い定型テキストに詠み込まれた言葉が読者のイメージを喚起し、時として大きな感動を誘発することも可能な、一種の感性コミュニケーション・メディアと捉えることが可能である（鈴木、2006）。このことと関連して、皆川（2005）は、俳句を題材とする対話・協同型教育実践の試みを通して、俳句の創作と鑑賞が一体となって機能し、季節とともに変化する森羅万象に対する「感性」とともに、見たこと・感じたことを的確かつ個性豊かに記録・表現する「知性」を育てることを実証し、互いの作品を読み合い語り合うことによって、共感と思いやりの心が育くまれ、他者の視点に立つてものごとを見つめる知性が磨かれる可能性を示唆するとともに、「俳句の創作と鑑賞は、観察対象や話題の共有、さらには子どもと大人との見方・感じ方の違いや共通点への気づきをもたらし、心を豊かに育てる異年齢間交流の場となる可能性を秘めている」と述べた。

俳句は、季節の風物と人との交感を十七音という制約のもとに表現しようとする定型詩であり、創作（詠み）と鑑賞（読み）という2つの楽しみ方がある（皆川、2008など）。「詠み」と「読み」の経験の蓄積は、それぞれの観点や技法の熟達化と共に、二つの活動の対話を進め、相互に深め合うであろう。各熟達化水準における作者・選者の「詠み」や「読み」の心理過程や、両者の相互作用の分析は、俳句の魅力解明の糸口となるであろう。分析方法としては、句会における入選句数・入選回数といった量的分析のほか、選評や作者による自注の内容といった質的分析が考えられる。

第1著者は、青年期より、有季定型・写生を信条とする俳句結社に所属し、月刊同人誌に投句している。この同人誌には主宰選、主宰や幹部同人による抽出句の選評（鑑賞文）などが掲載される。また、第1著者は、以下に示すさまざまな規模や形式の句会にも、参加している。①所属結社の中堅・若手同人による地域の句会（月1回、参加者15～20名）、②主宰により選抜された中堅同人による全国レベルの句会（年1～2回、30名程度）、③全国規模の研修会（年1回、200名程度参加）ならびに同人総会時の句会（2年に1回、150名程度参加）。④インターネット

ト掲示板を利用した句会（月に1～2回、11～14名参加）。これらのうち①の句会は、5句を投句し、その場では、一般参加者による互選（5句ずつ）と代表選（座の指導者による選）があり、選評を述べ合う。句会后、係により無記名の句稿が主宰に郵送され、主宰選の結果が各参加者に郵送される（代表選と主宰選は、選句数無制限）。②の句会は、1泊2日の吟行であり、10句投句の句会が2回行われる。各句会で互選（10句選）があり、最後に主宰選が発表され、講評が行われる。2回目の句会の後、全員による合評が行われる。③の句会は、ともに1泊2日の吟行であり、4句投句の句会が2回行われる。初日の句会は代表選（10句選）と主宰選選句数無制限のみである。2日目の句会には、互選もある（3句選）。いずれの日も、主宰の講評があり、日程の終わりには、各句会5句ずつの特選句が発表される。④の句会は、月当番がテーマ（季題など）、投句数、および選句数を決めて運営する。3句投句5句選で行われることが多い。月1回開催か月2回開催かは、当番の選択にゆだねられている。選句を掲示する場合には、参加者の大半が短い選評を添える。通常の句会では、選句は一斉に発表されるが、ネット句会では順番に発表されていく。

このように参加者の人数ないしは熟達度によってさまざまなレベルの句会があるが、選評・講評を注意深く聴いたり読んだりすることを継続しているうちに、主宰や幹部同人による選句・選評には、ある程度の一貫性と共通点あり、そのことは、彼らの指導を受ける一般選者にも波及していることがわかってきた。これらは、下記の6つの観点に要約される。

1. 情景のわかりやすさ
2. リズムのよさ（切れ）
3. 季節感（季節の風物への感動、季語の重み）
4. 独創性（着眼点のよさ、表現力）
5. 作者の心情への共感
6. 余情（想像の余地）

これらは、有季定型・写生派の選句基準といってもよいであろう。これら6つの観点から選句されるが、力点の置き方には個人差もしくは個性がある。本研究では、こうして導き出された選句基準が、俳句の継続的な創作経験のない人が有季定型という俳句の特徴を教示されたうえで、俳句の創作と鑑賞を試みた場合にも適用されるのかを調べることを本研究の目的とする。つまり、それほど俳句という表現形式には一貫性があり、俳句の魅力は経験を越えて伝承されていくものであることを検証することを本研究の目的とする。

2. 分析対象

教育大学の学部ならびに大学院において第1著者が担当した四国遍路に関する授業（下記に示す5回の事前授

業のうちの1回)では、まず、俳句の面白さ、豊かさは、有季定型によって生み出されることを伝え、その仕組み(十七音、季語)について、解説した。そして、「遍路の途上では、さまざまな風物に出会う。句の食材にも出会う。その一つ一つが季語なのである。歩き遍路は俳句をつくる絶好の機会であるといえる。この機会に、自分自身の心のかたちを、俳句という五七五の十七音に書き換えていく楽しさを味わってみよう。」と呼びかけた。さらに、以下のように基本的な俳句の創作法を教授した。

「俳句は十七音で、季語が一つ入っていればよい」

「俳句の基本リズムは、五／七・五 or 五・七／五」

歩き遍路の実施時期は、9月下旬、残暑の候であり、二泊三日で行われる。出発時に、俳句創作法入門、秋の季語集、メモ用紙から成る「俳句のしおり」を配付し、俳句の募集についての説明を行い、夜のミーティング時に、創作についての助言を行い、俳句の提出を求める。この取り組みは、2007年度より5年間継続しており、今回分析の対象とする俳句は、2009年度参加者79名(学部生66名、大学院生13名：男性40名、女性39名)による158句である。学部では、事前授業が4月から6月にかけて5回行われ、教育学、心理学、文学、歴史学、および地理学の教員が担当した。7月には、歩き遍路に向けてのオリエンテーション(学部・大学院合同)が行われた。

本研究では、大学生と大学院生が「四国遍路を歩く」という共通体験のもとで創作した俳句を読み合う句会を行い、選句と鑑賞文の記述を要請する。このようにして得られた俳句の選句傾向と鑑賞文の内容分析を行い、「読み」と「読み」の心理過程と両者の相互作用について分析し、俳句の魅力を醸成する要因について考察する。

2007年度より3年間の歩き遍路における俳句作品に含まれる語の出現頻度を調査した鈴木・皆川(2010)によれば、歩き遍路という共通体験を通じて詠まれた俳句に用いられる語彙の分布には、下記のような特徴がみられる。年度毎の俳句に詠まれた語の分布状況は、ほぼ類似していたが、各年度の天候の違いや目にすることの多かった自然の風物等は、高頻度で使用された語彙に反映されていた。例えば2007年は残暑が厳しく、2008年度は赤とんぼの類が多く観察されたこと、さらに2009年度は雨模様で花の盛りを過ぎていたことが如実に現れた。また、頻度2以下の名詞が80%程度を占めることから、作者が注目した対象は相当多岐に渡っていることが窺え、共通体験の下での俳句作品の多様性の源とも考えられた。最頻出語は「遍路」であり、「秋遍路」という季語の形または「遍路道」のような表現として、句に詠み込まれていた。遍路だけでは本来は春の季語とされ、遍路に秋という季節名を冠することによって秋の季語となることは、歩き遍路の事前授業時に教示されていた。因みに、同じく季節名である夏や冬を冠して夏遍路や冬遍路と称され

ることは、あまりない。これは、秋の遍路が春に次いで多いことに由来する。このような知識も、事前授業時に導入された。「秋遍路」と同時に詠まれた高頻度の語を抽出したところ、年度間の共通点ならびに相違点を見出すことができた。まず、「秋遍路」が「歩く」という語と同時に使用される頻度の多さは一貫しており、歩くことへの印象の結び付きの強さを読み取ることができた。年度ごとの特徴をみると、2007年度では「接待」や「空海」、2008年度では「仲間」や「友達」に特徴を見いだすことができ、歩きながら遍路の意味を感じたり考えたりするゆとりを示した作品が多かった。一方、2009年度は「滑る」「通る」に代表されるように、歩くことへの専心が感じられた。このことについて、鈴木・皆川(2010)は、「2007年度と2008年度は概ね好天であったのに対し、2009年度は初日が終日雨であったという気象条件の違いが強く反映されているのかもしれない」と考察した。

3. 方 法

研究協力者 鳴門教育大学の1・2年生、計20名(男性10名、女性10名)が本研究の協力者となった。彼らは、上述の歩き遍路の参加者であった。彼らのなかに、俳句の創作経験者はいなかった。なお、ここでは、同人誌投稿3年以上を俳句創作経験者と定義する

手続き 2009年10月初旬に、上述の歩き遍路参加学生を対象として、俳句鑑賞会についての趣旨説明と参加募集を行い、20名の参加を得るところとなった。10月中旬から下旬にかけて、分担して俳句データベースの作成を行い、作者名を伏せた俳句リストを作成した。上述のように79名で158句が創作されたが、季語の用いられていない俳句や、適切さを欠く表現の含まれる俳句が8句あったため、これらを除く150句を鑑賞の対象とした。11月上旬から中旬にかけての2日間、75句ずつに分けて、鑑賞会を開いた。無記名・縦書きで印刷された75句のリストを配付し、5句を選んで鑑賞文を書くことを求めた。俳句リスト配付後、各句を2度ずつ音読した。選句のルールとして、「自分の作った俳句は、選ばないこと」を教示した。鑑賞文には、俳句の描く情景、作者の心情、どのようなところに共感したか、魅力を感じたか、などを書くように教示した。文字数はとくに指定しなかったが、100文字程度書くことのできる記入欄を設けた。多くの参加者は、選んだ俳句に対して100文字前後の鑑賞文を書いていた。

4. 結果および考察

参加者20名により10句ずつ計200句が選句され、同数の鑑賞文が創作された。選句者数別にみた俳句数をTable1に示す。

Table1 選句者数別にみた俳句数

選句者数	該当俳句数	該当俳句数(集約)	比率(%)
8	3	10	6.7
7	0		
6	3		
5	4		
4	1	15	10.0
3	14		
2	27	27	18.0
1	38	38	25.3
0	60	60	40.0
合計	150	150	100

5名以上が選んだ高得点句は、10句であった。これは、全句数の6.7%にあたる。また、3～4名が選んだ俳句は計15句(28.0%)、2名が選んだ俳句は、27句(18.0%)、1名が選んだ俳句38句(25.3%)であった。残りの60句(40.0%)は、誰にも選ばれなかった。分析1では、第1著者が上記のうち高得点句10句の鑑賞文について定性的分析を行い、第1著者の俳句経験から見いだしてきた有季定型・写生派の選句基準(上記の6つの観点)との関係を検討する。皆川(2011)も、これらの鑑賞文の内容分析をおこなっているが、情動知能の概念に沿った分析であり、本稿における分析の観点とは異なる。分析2では、第1著者と第2著者の協議により、鑑賞会における選句者の多寡による俳句の特徴分析を行う。

4-1. 分析1の結果と考察

選句基準1は、多くの参加者によって採用されていた。高得点句の鑑賞文には、俳句の情景についての描写が含まれていることから理解される。たとえば、「空海と初秋の風に背を押され」という俳句に対する鑑賞文の大半では、空海という歴史的存在と初秋の風という自然への尊敬と感謝の気持ちが描写されている。例)「自分の力だけではなく空海と自然の力を借りて歩いているのだという尊敬と感謝の気持ちを抱いているのだと感じた。」

選句基準2は、あまり重要な選句基準にはならないようである。今回分析した俳句のほとんどが十七音の定型を守るものであったことから、魅力を判断する要因にはならなかったと考えられる。また、今回の参加者の鑑賞文においては、「調べがよい」「リズムがよい」「切れがある」といった記述は、ほとんどみられなかった。これらは、同人の選評では頻繁に用いられる表現であり、俳句経験による差とみなすことができる。

選句基準3は意識されているが、俳句創作経験者ほどには明示的に表現しない。たとえば、「竹林のすき間に見える秋の空」という俳句に対する鑑賞文には、必ずといっていいほど「竹林の間からときどき見える青空に秋を感じた」といった記述があり、「秋の空」という季語がこの句の中心に位置づけられていることが理解されるが、そのことが明記されているわけではない。つまり、「季節の

風物への感動」は描写されるが、「秋の空」という語を「季語」として意識しているわけではないのである。これに対し、俳句創作経験者は、「季語が効いている」「季語の使い方がうまい」「季語の本意をふまえている」といった言い回しにより、季節の風物を季語として強く意識するのである。

選句基準4は、多くの参加者が重視していた。「自分は気づかなかった」「自分にできない表現だ」「〇〇を△△に見立てているところがすごい」といった一文を含む鑑賞文の多さがそのことを物語っている。例)「秋遍路上り下りは人生路」という俳句に対する鑑賞文:「上り坂で苦しいときもあれば、割と歩きやすい下り坂もあったりという、歩む道の道のりの移り変わりを人の一生と重ね合わせてうまく表現している。」

選句基準5は、俳句経験者以上に用いられている。例)「杖のへり共に歩んだ秋遍路」という俳句に対する鑑賞文(一部省略):「歩くたびに、杖の減り具合が大きくなって、自分がこんなに歩いたんだと実感できたし、杖にも愛着がわいてきたということを思い出した。・・・」

選句基準6は、経験者ほど明示的ではないが選んでいる句は、想像の余地を残す俳句がかなりあり、鑑賞文にはそうした特徴を表す記述がみられた。例)「先人の道をふみしめ秋の山」という俳句に対する鑑賞文:「私たちが歩く以前に、たくさんの人たちがこの遍路道を歩いたんだという尊敬の思いが隠されているように感じる。」

上述のように、俳句創作経験のない人であっても、俳句創作経験者の選評から導き出した選句基準をある程度適用することができる。つまり、情景のわかりやすさ、独創性、作者の心情への共感、余情といった選句基準は、俳句経験を越えて共有される。こうした普遍性に、俳句の魅力の一端を感じとることができる。一方、俳句経験による違いも見いだされた。すなわち、リズムのよさという基準は、主として経験者が用いる。季節感という基準の扱いも、大きく異なる。いずれにせよ、鑑賞力・表現力の個人差は大きい。

4-2. 分析2の結果と考察

上記の俳句鑑賞会における選句結果について、選句者(共感者)の多寡による俳句の特徴分析をおこなったところ、下記の成果が得られた。第1著者と第2著者による協議の結果、上記の俳句は、「風物や出来事の報告に終始するもの」と、「風物や出来事を内省的にとらえて表現するもの」の2種類に大別できることが明らかとなった。後者の俳句には、高度な比喩的表現を駆使した作品も含まれていた。後者に分類される俳句は、3名以上の選句者(共感者)を得た俳句25句のうち17句(68.0%)、2名の選句者を得た俳句は27句のうち12句(44.4%)、1名が選んだ俳句38句のうち6句(15.8%)であった。これに対

し、選句者のいない俳句60句のうち後者に分類される俳句は5句(8.3%)にすぎなかった。このように、選句者数に比例して内省的な俳句が多くなることが明らかとなった。なお、第1著者と第2著者との間で、「内省的」という概念の捉え方に若干の違いがあり、上記の分類は必ずしも一致しなかったが、本論文では、第1著者による分類を採用した。この協議の継続を今後の課題とする。

5. 総合論議および研究展望

本研究では、第1著者の経験知によって導き出した有季定型・写生派俳句指導者・実作者の選句基準をもとに論を展開し、俳句未経験者の鑑賞文についても質的分析にとどまったが、今後は、語彙などの定量的分析と合わせて検討したい。

情報メディアとしての俳句の定量的分析に関して、心理言語学的ないし教育心理学的な視点を含む学際的な見地から、俳句という表現スタイルに凝縮された語の組合せが持つ特徴を様々な観点から分析することにより、表現力や創造力に関係する要因の科学的な解明に結びつくような知識発見を目指す試み(鈴木・皆川, 2010)も開始されている。これ以外にも、さまざまな分野からのアプローチが開始されている。

俳句の表現メディアとしての特性に着目した、言語心理学的あるいは認知心理学的な研究が、第1著者によって展開されている。たとえば、皆川(2000)では、俳句における「切字」の表現効果を測定するために、実際の俳句作品と、その切れ字部分を他の助詞に置き換えた「擬似俳句」をそれぞれ被験者に提示して、一つの句の中に現れる、語と語の間の相互関連度および情緒的印象の主観評価を行なった。たとえば、芭蕉の俳句を例にとると、次の(a)の句で「古池や」の「や」(切字)の部分で、助詞「に」に置き換えたものが擬似俳句(b)である。切字とは、「その部分でいったん切ることによって前後のつながりを印象づける」(外山, 1976)とされる語法で、「や」「よ」などの句中の助詞、「かな」「けり」などの句末に置かれる終助詞や助動詞、あるいは連体止めなども含まれる。

(a) 古池や蛙飛び込む水の音

(b) 古池に蛙飛び込む水の音

その結果、擬似俳句の方が、句全体の意味的なまとまりを示す語句間の相互関連度が高い傾向があるのに対し、情緒面の印象評価値は低下することを示しており、興味深い。別の言い方をすれば、俳句は部分の総和を越えるゲシュタルト性の特徴としている(皆川, 2005)。

皆川(2001)では、俳句に対する2種類の理解度の評定として、「情景的理解尺度」(作品に描かれた情景のわかりやすさ)と、「心情的理解尺度」(作者の気持ちのわかりやすさ)の比較を行なっている。この結果、情景的理解度は心情的理解度を上回るが、両者の差が大きな

るにつれて、俳句に対する被験者の嗜好度が低下する傾向が見られた。このことは、俳句における情景描写と内面透写の二重性が反映されたものと、皆川は捉えている。

鈴木(2006)によれば、俳句を含む文芸作品についての通時的・共時的な特徴分析は、人文科学と情報技術の連携により、活発となってきている。たとえば、竹田・福田(2002)は、和歌の歌集データを用いて、作品(集)の年代や本歌の存在の推定等について、従来からの定説とは異なる確証を与えている。ここでは、自立語だけでなく、付属語も考慮に入れた、和歌の技法上の特徴に基づく、作品間の類似性の推定等が効果をあげている。

鈴木(2006)によれば、永幡・岩宮(1999)による音環境に関する生態学的な研究は、江戸時代から近代、現代を通じた多くの俳句作品に詠み込まれた音(虫の音、祭り、道具等の様々な音)と、その音が聞かれた状況(季節、場所など)の抽出・分析を行い、時代とともに変遷する音環境(サウンドスケープ)の様相を提示した。鈴木(2006)によれば、永幡・岩宮(1999)は、自立語とその意味分類(季節・時間・場所など)を鍵として研究を行い、江戸時代から現代にかけて時代を追う毎に、草木の風にそよぐ音のような小さな音が聞かれなくなり、鉄道など交通に関する音が増えていることを明らかにした。また、物売りの声など消えつつあるものもあるが、祭りや時を告げる鐘の音などは、時代を越えて親しまれている。このような俳句テキストデータを基にして、時代とその環境の変化とともに移り変わる人々の感性を、マクロ的な視点で捉えることも可能であるとし、「その意味で、時代ごとの社会文化的な知識体系とも言うべき季語データベースの構築は重要であり、研究者間での情報共有が課題である(吉岡, 2000)。

俳句を取り巻く環境の変化にも注目しなければならない。感性コミュニケーション・メディアと言ってもよい俳句が、20世紀末から21世紀にかけてのインターネット時代の到来により、その本質を保ちながらも少しずつ変貌を遂げ様々な外的要因との関係で変化に富んだ発展をしてきているように思われる。例えば、ネットワークを通じて作品を募集し、句会を催すようなことが容易にできるようになってきている。パソコンやモバイル端末を通じて、いつでもどこでも俳句を作り電子的に投稿することが可能であり、不易流行の様相を呈している。このため、結社の枠などに捉われず、自在に作品を鑑賞し合うことが広まりつつある。俳句のルーツである「俳諧の連歌」(現代では連句)は、発句とそれに続く脇句から始まる、いわゆる付け合いの楽しさを一座で共有するものであり、参加者による協同創作である。この協同創作を楽しむ上でも、こうしたネットワーク環境は、時間ならびに空間を越えた場を提供する。

マルチメディア、特に視覚的なコンテンツである写真やデジタル絵画と組み合わせた作品を編集することも容易になり、これまでになかったような形の表現を作り出す可能性が開けてきた。写真と俳句を重ね合わせたフォト俳句作品の愛好者はテレビ番組の登場とともに増加しつつあるが、フォト俳句は、絵画と合わせて一つの作品を成す「俳画」が現代風にアレンジされたものととらえることができる。

このほか、季語や句例データを検索する等のソフト的なサービスも登場している。さらに、グローバル化に伴う異文化との接触により、俳句自体も変容を遂げつつあると言って過言ではない。例えば、英語のHaikuでは、個人の体験の中のある一瞬の気づき (awareness) を中核とする “Haiku Moment” という概念が大きな意味を持つ。そこには新たなコミュニケーションの可能性が秘められている (鈴木, 2006)。

上述のように、このように国境を越え言語の違いを乗り越えて進化しつづける俳句は言葉を用いて創作されるが、音楽性と絵画性をあわせもつ素材であり、近年、携帯電話やパソコンを通じた投句などもおこなわれ、グローバル化の様相を呈している。また、写真、動画、音響などの同時提示により表現効果をねらうというマルチメディア化の傾向も現れつつある。このような流れから、俳句に対して、文学、言語学、心理学のみならず、美学、感性工学、情報科学、メディア科学など専門分野の枠を越えた、学際的なアプローチが期待されている。本論文の著者2名を含む研究グループでは、このような学際的研究交流・情報交換の場として、クロスメディア俳句研究フォーラムを立ち上げ (鈴木・皆川・山本・吉田・吉岡, 2003)、日本心理学会において継続的にワークショップを開催するなどの取り組みを継続している。

このような観点から、情報メディアないしは感性コミュニケーション・メディアとしての俳句に関する情報科学その他の学際的な研究も行われはじめている。こうした学際的な研究との連携を強め、定量的分析と定性的分析を並行して行うことが、研究の実をあげることにつながると考えられる。今後解き明かすべき人間の感性や創造性に関する示唆を与えることをねらいとして、研究を継続したい。

引用文献

加藤慶二 (1996). ドイツ・ハイク小史 永田書房.
皆川直凡 (2000). 俳句における切字の効果に関する心理学的研究 樟蔭東女子短期大学研究論集, 8, 11-17.
皆川直凡 (2001). 認知心理学の研究対象としての俳句について 鳴門教育大学研究紀要, 16, 25-32.
皆川直凡 (2005). 俳句理解の心理学 北大路書房.
皆川直凡 (2008). 日本心理学会ワークショップ「俳句

の魅力への心理学的アプローチ「詠み」と「読み」との対話の分析から俳句の魅力にせまる」企画趣旨, 日本心理学会第72回大会発表論文集, .

皆川直凡 (2011). 心理学からみた歩き遍路 体験, その人間形成的意義—学生による創作俳句の内省・説明文と鑑賞文の分析から— 鳴門教育大学研究紀要, 26, 35-42.

皆川直凡・賀集寛 (1990). 俳句を構成する語の相互関連度と俳句に対する共感度との関係, 計量国語学, 17, 265-272.

皆川直凡・正岡繁豊 (2008). 俳句を素材とする協同的活動の試みとその評価—話し合いを円滑に進める要因の分析— 日本教育心理学会第50回大会発表論文集, 185.

皆川直凡・大黒伸介 (2004). 俳句を素材とする協同的学習の展開—知性と感性の育成を目指して— 鳴門教育大学学校教育実践センター紀要, 18, 103-112.

永幡幸司・岩宮眞一郎 (1999). 俳句に詠み込まれた音とその音が聞かれた状況の関係の時代変遷 『サウンドスケープ』 日本サウンドスケープ協会誌, 1, 73-78.

佐藤和夫 (1987). 俳句から HAIKU へ 南雲堂.

鈴木雅実 (2006). 感性コミュニケーションメディアとしての俳句 庄司裕子 (編) 小特集「感性とコミュニケーション」 人工知能学会誌, 21 (2), 189-194.

鈴木雅実・皆川直凡 (2010). 共通体験を通じて詠まれた俳句からの知識発見の試み 人工知能学会 2001 年全国大会, 1I1-0S1a-2.

鈴木雅実・皆川直凡・山本健一・吉田香・吉岡亮衛 (2003). 俳句への学際的なアプローチ—クロスメディア俳句研究フォーラムの発足に寄せて— 情報処理学会研究報告, 51, 1-7.

竹田正幸・福田智子 (2002). 古典和歌からの知識発見—モビルスーツを着た国文学者— 特集: 失われゆく情報の復元・保存技術 情報処理, 43 (9), 941-948.

外山滋比古 (1976). 省略の文学 中央公論社.

坪内稔典 (1999). 坪内稔典の俳句の授業 黎明書房.

山下一海 (1998). 俳句への招待—十七音の世界にあそぶ— 小学館.

吉岡亮衛 (2000). 季語データベースの構築と俳句の季語の自動判定の試み 情報処理学会研究報告, 48, 57-63.